

多和田葉子の国際コロキウムに参加して

開催日：2009年5月14日・15日

場所：トゥール（フランス）

齋藤 由美子

2009年5月14日と15日にフランスのトゥールで日独のバイリンガル作家、多和田葉子の国際コロキウムが開催された。主催者はトゥール大学のドイツ文学者であり、多和田のフランス語翻訳者でもあるベルナル・バヌン氏と、今年、多和田に関する書籍¹を出版したリンダ・クワラン氏などである。多和田の国際シンポジウムやワークショップは2004年から2007年にかけてアメリカ、スペイン、カナダ、日本でも開催されているので、今年で5回目となる。私が参加したのはそのうち2005年のスペインのみだが、報告者の人数が大幅に増加していることに驚いた。残念ながら、以前知り合ったスペインのドイツ文学者たちとフランスで再会することはできなかったが、いつも同じ顔ぶれでないことも多和田の国際シンポジウムの特徴だろう。会場は当初予定されていたトゥール大学の講堂がストライキで閉鎖され、一日目は急遽大学の地下にある石造りのひんやりしたホールで、二日目は礼拝堂でステンドグラスを背に報告することになった。

20人の報告者のうち5名が日本、3名がフランス、1名がカナダ、5名がアメリカ、4名がドイツ、1名が韓国、1名が中国から来ていた。そのうち日本からの報告者ダヌータ・ウォンツカ氏はポーランドからの留学生であり、ガブラコヴァ・デンニツァ氏はブルガリア出身で日本に長く留学した後中国の大学で教えているなど、現在研究の拠点としている国が必ずしも出身国であるわけではないということはここで強調したい（ちなみにウォンツカ氏、デンニツァ氏は現代文芸論研究室とも深くかかわりのある研究者だ）。参加者の専門もドイツ文学、日本文学、比較文学というように多分野にわたっていた。その結果たとえば、アメリカの日本文学者とフランスのドイツ文学者という通常接点のない研究者たちが同じ作家をテーマに議論することになった。

報告の言語はドイツ語とフランス語が優先され、英語も認められた。場合によっては通訳つきで日本語も可能であるとのことだったが、実際は半数近くが英語で

報告し、フランス語とドイツ語の報告がほぼ同数だった。また唯一日本語で報告した中川成美氏は、主催者のバヌン氏に日本語で報告するように頼まれたという。その際一部英語で紹介しただけで通訳はなかった。

通訳なしで多言語を使用する国際シンポジウムは珍しいだろう。ほとんどの参加者が理解できない外国語の報告に身をさらすことになった。シンポジウムの終了後、ある報告者が興奮しながら、「理解できない言語を聞いている時もまったく退屈することはなかった」と語っていたのは忘れられない。一方多和田はフランス語を聞いているときが一番面白いと述べていた。彼女にとってドイツ語、日本語、英語は不自由なく聞き取れる言葉であるが、フランス語はほかの言語に比べれば心もとない。しかしだからこそフランス語の響きそのものを味わうことができる。このシンポジウムの参加者たちは多和田のいう「エクソフォニー」を実体験することになったのである。

ここで簡単に全体の報告の概要を述べたい。シンポジウムの題目は *Weltliteratur au global village* (グローバルヴィレッジの世界文学) で、5つのセクションから成り立っていた。セクションⅠは「言語の謎(神秘)」であり、多和田作品の言語的側面を中心にドゥルーズ＝ガタリやヴァルター・ベンヤミンを援用しながら理論的に分析する報告が目立ったが、そこにはフランス語と日本語の完全なバイリンガルであり、日本文学の著名な翻訳者であるセシル・坂井氏をはじめ、イディッシュ語を含め13ヶ国語を理解できるリヴィア・モネ氏など、言語と複雑な関係を結んでいる報告者もいた。モネ氏の報告では、一つの文にドイツ語と英語、フランス語、日本語が混じり合ってしまうという瞬間もあり、聴衆がどよめいた。その原稿がもともと日本語で書かれていたことをあとから知ってさらに驚いた。

次に「身体とエクリチュール」と名づけられたセクションⅡでは多和田の芥川賞作品「犬婿入り」における「匂い」についてウォンツカ氏が、自動筆記の問題と多和田の作品を関連付けて松永美穂氏が具体的に作品を分析していた。松永氏は多和田の日本語の詩を自身でドイツ語に翻訳したものをいくつか紹介していたが、徐々に会場が笑いに包まれ、最後の詩文「声から判断すると、鼻にピをたらしていて」というところで、大爆笑となった。ドイツ語でPiは円周率という意味があるが、様々な言語背景をもつ会場が笑ったのはピが円周率に化けたせいだけではないだろう。松永氏は「ピとは一体何なのか」と問いかけ、日本語として連想できる水しぶきや鳥の糞などを挙げていったが、それらと聴講者たちの様々な連想が重なり合って大きな笑いが生まれたように思う。ちなみにこのセクションではクリスティアーネ・

イヴァノヴィッチ氏が多和田の作品における「Oと口」について発表する予定だったが、残念ながら都合によりシンポジウムに参加することはできなかった。

セクションⅢでは「テキストと声、イメージ」についての報告がされ、作品「旅をする裸の眼」を題材に多和田と映画について論じたものが多かった。この作品の主人公はカトリーヌ・ドヌーヴの出演する映画を、フランス語をほとんど理解できずに映像をもとに描写している。各章のタイトルは映画のタイトルにもなっていて、現実と映画が交じり合いながらすすんでいくのだが、なかでもマルティン・ラス氏はコンピューターを巧みに操り、実際の映画を一部スクリーンに映し出ししながら、作品の中で描写されていたカトリーヌ・ドヌーヴの声を文字とともに読むことを試みていた。

翌日は「西洋の一東洋の」というタイトルのセクションⅣから始められた。このセクションでも作品「旅をする裸の眼」についての分析がいくつもあった。例外的に中川氏は唯一私の報告と同じ作品「ボルドーの義兄」を扱っていた。彼は西洋の植民地主義に対する批判に焦点を当ててこの作品を分析していたが、そこから主人公がシャーマンのような存在であるということを出していった。私自身の作品分析の切り口は全く異なっていたのだが、同じ結論に達していたのでドキッとさせられた。

最後は「翻訳について」というタイトルを掲げたセクションⅤだ。私はこれまで翻訳をテーマに多和田の作品を研究していたので、どの報告も興味深かった。ユリア・ゲンツ氏はエッセイ集 *Überseetzungen* (*Übersetzungen* は「翻訳」の複数形だが、多和田は t を e に変えている) のなかのいくつかの作品を素材に翻訳について論じていた。ベッティーナ・ブランツ氏は自らの多和田作品のオランダ語翻訳をもとに分析し、またユンヨン・チョイ氏も同様に韓国語に翻訳するときの困難さを報告していた。例えば翻訳不可能性の一例として *Überseetzungen* のタイトルに注目していたが、*See* (海)、*Übersee* (海外)、*Seezunge* (シタピラメ) などの組み合わせを指摘したうえで、このタイトルの視覚的な側面に注意を向け、イタリック体で書かれた真ん中の *see* が、キーワードあるいは繋ぎの言葉としてみなすことができ、それが英語の *see* (見る) であると解釈していた。またこのタイトルが漢字の構造を想起させ、*see* (見) は部首としてとらえることができ、左に抽象的な語 *über* (〜の上に、〜を超えて) を右に人間の器官という具体的な語 *zunge* (舌) を備えていると述べていた。なるほど「辞」や「活」にも舌があり、人間の身体の一部(手、耳、口など)が漢字には多く含まれている。あたりまえのことだが、これをドイツ語に

置き換えてみると異様であり、チョイ氏の指摘は面白かった。

私は今回の報告で多和田がインタビューや講演、エッセイなどで、作品や創作について述べていることはいっさい引用しないということを自分と約束した。多和田を前に本人が言っていることを繰り返しても意味がないと思われたからだ。もちろん多和田が報告を聞いてどのように反応するかはとても気になった。しかしそれは私の想像が正しかったかどうかを聞いたかったからではない。何か事実があったとして、それを突き止めること自体に関心はなかった。研究者たちが自分の作品について報告するコロキウムに参加したがる作家は多いそうだ。多和田はむしろ終始報告を楽しんで聞いていた。本人に意見を求められた時、快く答えるか、あるいは解釈の正否を問うような場合、徹底的に沈黙を通した。そのような作家だからこそ、私も自由に分析することができたのだ。多和田の作品に限らず、いつも創作するように論文を書きたいと思っていた。それがどういうことなのか実はまだよくわからないが、シンポジウムへの参加が今後の研究のための大きな励みになったことは確かだ。

パリでの前夜祭も入れると、コロキウムは12日から始まっていて、パリやトゥールで多和田による朗読また劇団らせん館の「旅をする裸の眼」の上演も行われた。さらに16日にはトゥール近郊の古城に皆で訪れるというエクスカッションもあり、とにかく至れり尽くせりであったことを最後に強調するとともに、このコロキウムを企画準備してくださった方々に心から感謝を述べたい。

注

1. Linda Koiran: *Schreiben in fremder Sprache - Yoko Tawada und Galsan Tschinag: Studien zu den deutschsprachigen Werken von Autoren asiatischer Herkunft*, Iudicium, 2009.